

## 生涯学習支援事業報告

|       |   |      |       |
|-------|---|------|-------|
| 事業の名称 | 東北大学オープンカレッジ<br>「杜のまなびや」  | 事業代表 | 野口 和人 |
| 目的    | <p>地域社会に対する貢献の一環として、また、インクルーシブ教育の発信としてオープンカレッジを位置づけ、知的障害者の生涯学習にかかわる支援を行う。また、受講生・企画運営スタッフ・講師が「学び」の意味を再考する場とする。</p>   |      |       |
| 対象者   | <p>知的障害のある学外受講生<br/>宮城県内の大学・大学院に在籍する学生</p>  |      |       |
| 内容    | <p>本事業は、上述の目的に沿って、2006年度から実施されてきた。それまでも、地域に在住する知的障害のある方たちに大学のリソースを開放し、生涯学習の機会を提供するという公開講座（オープン・カレッジ）の試みは、幾つかの地域・大学で実施されてきた。川住(2007)によれば、それらの一般的なねらいは、①知的障害者が学習を通して社会人としての生活や個人の生活を豊かにすること、②当事者同士の交流が促され友人関係が広がることにある。本事業では、これら2つのねらいの重要性を踏まえつつ、知的障害者が大学で学ぶことの意味として、①大学生と知識・体験を共有し、討論の中から様々なことに気付くこと、②教員・学生が専門性を問われる場面に立ち会うことの2つを付加し（川住, 2007）、大学教員は、それぞれの専門領域の内容をわかりやすく効果的に伝える方法を工夫しつつ講義を行い、学生は、補助者・支援者という立場ではなく、共同学習者として共に学ぶという形式で、知的障害者への生涯学習支援を展開してきた。また、同時に、講義の準備段階及び講義実施後の講義担当教員の発話、講義における発話や講義の展開、及び受講生（知的障害者、学生）へのアンケート等の分析を通じ、①効果的な学習プログラム内容と援助方略、②受講生（知的障害者、学生）の意識変容、③講義を担当した大学教員の意識変容についての検討を行ってきた。</p> <p>しかしながら、本事業の取り組み開始から10年を経て、幾つかの課題も生じてきた。端的には事業の実施体制に関わることであるが、今</p> |      |       |

|  |
|--|
| <p>年度は改めてこれまでの取り組みを振り返り、今後事業を推進していくうえでの課題を整理することとした。</p> <p>以下は、およそ10年間にわたり実施してきた本事業の後半6年間の講義内容、受講生数である。</p> <p><b>【2011年度】</b></p> <p>①講義題目：「防災・ひと・絆」<br/>受講生：学習者12名，共同学習者8名</p> <p>②講義題目：「語りを束ねることで見えてくること—調査をしよう—①」<br/>受講生：学習者13名，共同学習者6名</p> <p>③講義題目：「語りを束ねることで見えてくること—調査をしよう—②」<br/>受講生：学習者12名，共同学習者8名</p> <p><b>【2012年度】</b></p> <p>①講義題目：「働くことについて」<br/>受講生：学習者7名，共同学習者8名</p> <p>②講義題目：「性格の新しい見方をまなぶ—ユングのタイプ論より—」<br/>受講生：学習者5名，共同学習者10名</p> <p>③講義題目：「学んだことをつたえあう」<br/>受講生：学習者6名，共同学習者7名</p> <p><b>【2013年度】</b></p> <p>①講義題目：「『ちがう』ということを考えよう」<br/>受講生：学習者10名，共同学習者4名</p> <p>②講義題目：「自分の考え方を伝えよう」<br/>受講生：学習者12名，共同学習者7名</p> <p>③講義題目：「ワークショップ—かんじる・つながる・りかいする」<br/>受講生：学習者8名，共同学習者5名</p> <p><b>【2014年度】</b></p> <p>①講義題目：「就職活動の隠れたしくみ」<br/>受講生：学習者6名，共同学習者5名</p> <p>②講義題目：「『こころ』って、なんだろう？」<br/>受講生：学習者7名，共同学習者8名</p> <p>③講義題目：「スポーツを楽しもう！！」<br/>受講生：学習者7名，共同学習者8名</p> <p><b>【2015年度】</b></p> |
|--|

①講義題目：「つたえる，つたわる」

受講生：学習者 6 名，共同学習者 11 名

②講義題目：「音楽の教育って？」

受講生：学習者 5 名，共同学習者 5 名

③講義題目：「お金ってなんだろう」

受講生：学習者 4 名，共同学習者 7 名

**【2016 年度】**

①講義題目：「自分の気持ちと仲良くなるろう」

受講者：学習者 9 名，共同学習者 16 名

これまでの取り組みを整理してみると、学習者及び共同学習者の確保が年々難しくなっていること、前者については参加者の固定化が生じていることが明らかとなった。参加者の固定化については、オープン・カレッジのねらいの一つである友人関係の構築にとっては一定の意味を持つと考えられるが、友人関係を広げることに关しては必ずしも望ましい状況ではない。共同学習者については、HP やチラシ掲示等を通じて広く呼びかけを行っているものの、発達障害学分野の学生・大学院生が中心となっている現状があり、インクルーシブ社会構築への寄与という点からは、周知方法等の検討を進めていかなければならない。また、同じ大学教員に繰り返し講師を依頼している状況があること、共同学習（討論）という形態を採っていることもあって、具体的な講義テーマは異なっているが、講義の中でコミュニケーションに関わることにウェイトが置かれることが多くなっていることも明らかとなった。オープン・カレッジのねらいのひとつである「社会人としての生活や個人の生活を豊かにすること」の検証に基づいて学習内容・学習プログラムを構築していく必要があると思われるが、その検証方法も十分に確立されているとは言い難い状況にある。さらに、これまで発達障害学分野の大学院生がコア・スタッフとなって準備・実施にあたってきたが、在籍者の構成（社会人院生が多くを占めるようになってきている）や在籍者数の関係で、このような体制での事業実施も難しくなっている。

以上の様々な課題について、現時点では必ずしも明確な解決方法を見出せていないが、今後、他の地域・大学で実施されているオープン・カレッジの状況を確認しながら、さらに検討を進めていく予定である。

|         |  |
|---------|--|
| ス タ ッ フ | 野口 和人（東北大学大学院教育学研究科教授）<br>藤村 励子（東北大学大学院教育学研究科博士後期課程）<br>鴻野美和子（東北大学大学院教育学研究科博士前期課程）<br>成田 詩織（東北大学大学院教育学研究科博士前期課程） |
|---------|--|